

# 塔における心柱立と棟上

濱島 正士

はじめに

- 一 遺構における工程の記録
- 二 文献にみる工程の記録
- 三 心柱立と棟上
- 四 心柱の立て方
- 五 工事期間

はじめに

飛鳥時代に中国・朝鮮半島から伝えられた仏塔では、仏舎利の奉安に直接関係する心柱が最も重視され、建立に際しては最初に「心柱立」が行われ、その期日が記録された。しかし、平安時代になると、元來塔には棟木が無いにもかかわらず、他の建物と同じ「棟上」が心柱立と同時に、あるいは心柱立に替わって記録に現れてくる。

それは心柱の工法の変化や重要度の低下に関連するもので、日本で創始された多宝塔<sup>(1)</sup>に起因するのではないかと考えられる。室町時代以降になると、さらに棟上の内容が変化するらしく、工程からみてかなり遅い時期に行われている。

塔建立の際の重要な工程であり儀式でもある「心柱立」と「棟上」のこうした問題について、遺構と文献の記録から探ることとし、あわせて心柱の工法、工事期間についても論及する。

## 一 遺構における工程の記録

重要文化財の塔について、棟札・墨書・文書等から工程に係わる事項とその期日をあげたのが表一である。このなかには、明通寺三重塔など後世の記録によって、必ずしも建立時の状況を正確に

はじめに

表1 遺構の工程記録

名称	事項	出典
明通寺三重塔	文永7 (1270) 10・13棟上	明通寺縁起
明王院五重塔	貞和4 (1365) 12・18九輪上	伏鉢刻銘
羽黒山五重塔	応和2 (1369) 10・30柱立, 永和3 (1377) 4・27九輪上	慶長13年棟札写
向上寺三重塔	永享4 (1432) 1・13斧斤始, 同年2・18立柱, 同年6・3上棟	向上寺由来
法観寺五重塔	永享10・12・8立柱, 同12・4・16供養	蔭涼軒日録
興福寺五重塔	応永33 (1426) 4・10空輪上, 同年6・27上棟	古記部類
八幡神社三重塔	康正2 (1456) 10・8杣始, 長祿元 (1457) 11・13番匠始, 同2・2・15柱立, 文正元 (1466) 3・29上棟	心柱墨書・棟札
吉田寺多宝塔	寛正3 (1462) 1新始, 同年3・5柱立	心柱墨書
小山寺三重塔	寛正6・初秋・26空輪上	相輪宝珠刻銘
智恩寺多宝塔	明応9 (1500) 3手斧始, 同年7・26柱立, 同年10・19心柱立	墨書
大樹寺多宝塔	天文4 (1535) 4・29身柱立	心柱墨書
金剛寺多宝塔	慶長10 (1605) 9・25真柱立	心柱墨書
乙宝寺三重塔	慶長19・5・21立始, 元和6 (1620) 4・17建納	棟札
教王護国寺五重塔	寛永18 (1641) 12・13新始, 同19・9・3地鎮, 同年9・5居礎, 同閏9・27立柱, 同20・5・2九輪之棟の槌打, 同21・7・6入仏	閨書并日記
新勝寺三重塔	宝永6 (1709) 10・2細工初, 同8・10・10棟上, 正徳2 (1712) 3造立	心柱墨書
大石寺五重塔	延享4 (1747) 6・28新始, 寛延2 (1749) 6建立成就	宝塔建立之由来
興正寺五重塔	寛政9 (1797) 6・24新始, 文化2 (1805) 4・29地鎮・柱立, 同4・10落成, 同5・3・24~4・8入仏	棟札
日光五重塔	文政元 (1818) 9・17上棟	銅棟札

伝えているとは限らないものもある。以下、工事の状況がある程度分かるものについて時代順にみてみよう。

羽黒山五重塔 「慶長十三年修理棟札写」によると、  
 応和二年（一三六九）十月晦日に柱立を行い、七年六  
 カ月後の永和三年（一三七七）四月廿七日に九輪を上  
 げている。

向上寺三重塔 『向上寺由来』では、永享四年（一  
 四三二）正月十三日斧斤始、二月十八日立柱、三月  
 中に初重、四月五月に二重三重目を造り、六月三日には  
 上棟を行ったといい、初重巻斗に「永享四年三月十五  
 日」の墨書があって、これを裏付けている。さらに、  
 二重の簀束には「永享七年六月廿五日」の墨書がある  
 ので、棟上から三年以上も雑作等に掛かっていたこと  
 が分かる。

法観寺五重塔 『蔭涼軒日録』によると、永享十年  
 十二月八日立柱、一年四カ月後の同十二年四月十六日  
 に供養された。

吉田寺多宝塔 心柱に墨書があり、寛正三年（一四  
 六二）正月新始、三月五日柱立の行われたことが分か

るが、その次の「寛正四年六月十三日」は上の二字が判読不能なため何を指すのか明らかでない。高欄地覆に「文正元年（一四六六）三月十一日」の墨書があるので、その頃雑作を行っており、新始から完成までは四年二カ月以上掛かったことになる。

**八幡神社三重塔** 心柱の墨書によると、康正二年（一四五六）十月八日杣始、翌長祿元年十一月十三日番匠始、同二年二月十五日柱立が行われている。さらに棟札があって、文正元年（一四六六）三月廿九日上棟と記しており、柱立から上棟まで八年一カ月を要したことが分かる。

**智恵寺多宝塔** 柱の墨書によると、明応九年（一五〇〇）三月手斧始、七月廿六日柱立が行われ、十月十九日に心柱立が行われたらしい。七月の柱立は下重の柱と考えられる。

前記の羽黒山五重塔・向上寺三重塔・法観寺五重塔・八幡神社三重塔・吉田寺多宝塔では「柱立」と記すだけで、心柱を立てたのか初重柱を立てたのかは明らかでない。法観寺塔は心柱が心礎上に立つから、心柱と初重柱はほぼ同時に立てられるが、他の四塔は心柱が初重天井上に立つため、初重柱を立てたあと暫くして心柱が立てられることになる。向上寺塔・八幡神社塔・吉田寺塔の立柱は手斧始との関連からすると初重柱立であろうか。

**乙宝寺三重塔** 棟札によると、慶長十九年（一六一四）五月廿一

日に立始め、五年十一カ月後の元和六年（一六二〇）四月十七日に建納めている。元和五年九月四日の「造立」が何を指すのかは明らかでない。

**教王護国寺五重塔** 『聞書并日記』によると、寛永十八年（一六四一）十二月十三日新始、同十九年九月三日地鎮、同月五日居礎、約二カ月後の閏九月廿七日に立柱が行われている。翌廿年五月二日「九輪之棟ノ槌打」があり、同廿一年七月六日入仏が行われた。新始から二年七カ月である。

**新勝寺三重塔** 心柱に墨書があって、宝永六年（一七〇九）十月二日細工初、同八年十月十日棟上の行われたことが知られる。翌正徳二年三月の造立は完成を指すものであろうか。

**大石寺五重塔** 『宝塔建立之由来』によると、延享四年（一七四七）六月廿八日に新始が行われ、二年後の寛延二年六月に完成している。

**興正寺五重塔** 棟札には、寛政九年（一七九七）六月廿四日新始、文化二年（一八〇五）四月廿九日地鎮并に柱立、同四年十月落成、翌五年三月廿四日四月八日入仏と記されている。新始から落成まで十年四カ月を要したことになる。

以上のほか、工程を示す文字は無いが部材に年月日の墨書があり、ある程度工事の状況が分かるものとして、根来寺多宝塔と西明

寺三重塔（栃木）とがある。

**根来寺多宝塔** 下重丸桁に文明十二年（一四八〇）の墨書があるので、この頃下重組物が組上げられたのであろう。上重軒支輪裏板や心柱継手には明応五年（一四九六）の墨書があり、相輪八葉に永正十年（一五一一）、瓦に同十二年の篋書があつて、永正十二年にはほぼ形のでき上つていたことが分かる。しかし、雑作が完了したものは下重天井支輪裏板の墨書にみえる天文十六年（一五四七）頃であらうか。下重組立以来六十七年が経過している。

**西明寺三重塔（栃木）** 心柱上部の刻銘「天文六年（一五三七）六月十八日」は心柱立であらうか。相輪露盤には「天文七年二月吉日」の刻銘があり、鑄造あるいは上げた時期を示している。棟札に「同九年極月造立」とあるので、その頃完成したのであろう。

## 二 文献にみる工程の記録

前項でみたように、遺構についての確かな記録は南北朝時代以降しかない。そこで、文献に現われる鎌倉時代以前の塔について、工程の期日を示す記録を拾ってみると表二のようになる。飛鳥・奈良時代は記録が少なく、その内容も着工後の早い時期にあたる「心柱立」あるいは「舍利安置」、ほぼ形の出来上った「露盤上」が断片

的にみられる程度である。平安時代に入っても前期は少ないが、造塔が盛んに行われた後期になると日記類に記録が多く、かつ詳細なものがみられる。すなわち、着工時の「事始」・「木作始」・「手斧始」に始まり、「築壇」、「居礎」、「心柱立」、「棟上」、そして竣工時の落慶「供養」等があり、工事期間の判明するものも少なくない。以下、主なものについて時代順にみることにする。なお、これら文献の中には後世編纂されたものもあつて、検討を要する記録があることはいうまでもない。

**法興寺塔** 推古天皇元年（五九三）正月十五日仏舍利が心礎に置かれ、翌日利柱が立てられた（『日本書紀』）。同四年十一月には寺を造り終っているから、塔もそれまでに竣工したとすれば、塔の工期は四年足らずになる。『諸寺縁起集』の記事や遺跡の発掘結果から、塔は五重塔と考えられている。

**山田寺塔** 天武天皇二年（六七三）十二月十六日に仏舍利を納めて心柱が立てられ、同五年四月八日露盤（相輪）が上げられた（『上宮聖徳法王帝説』裏書）。心柱を立てる前と相輪を上げた後の工事を加えると、四年前後の工期であつたのだろうか。

**東大寺東塔** 天平勝宝五年（七五三）三月三日に心柱を立て（晋家本『諸寺縁起集』）、天平宝字八年（七六四）に露盤を上げた（『東大寺要録』）とあるので、着工から竣工まで少なくとも十一年を要

表2 文献にみる工程記録

名 称	事 項	出 典
大野丘の北の塔 法興寺塔	敏達天皇14 (585) 2・15舍利を柱頭に葺む 推古天皇元 (593) 1・15舍利を刹柱の礎中に置く, 同 1・16刹柱を建つ	日本書紀 "
豊浦寺塔	舒明天皇6 (634) 3・15心柱を建つ	扶桑略記
山田寺塔	天武天皇2 (673) 12・16心柱を建て柱礎に舍利を置く, 同5・4・8露盤を上ぐ	上宮聖徳法王帝 説
法起寺三重塔	慶雲3 (706) 3露盤營作	露盤銘 (太子伝 私記)
栗原寺三重塔	和銅8 (715) 4鐘盤進上	露盤銘
東大寺東塔	天平勝宝5 (753) 3・3心柱立, 天平宝字8 (764) 露 盤構上	諸寺縁起集, 東 大寺要録
雲林院多宝塔	天徳4 (960) 2・24心柱立, 応和3 (963) 3・19供養	日本紀略
興福寺五重塔	万寿4 (1027) 8・23柱立, 長元4 (1031) 10・20供養	小右記, 左経記
法成寺五重塔	長元2・7・23心柱立, 同3・10・29供養	小右記目録, 日 本紀略
法成寺兩塔 (三重 塔)	承保2 (1075) 8・14東塔心柱立, 承暦3 (1079) 10・ 5供養	為房卿記
教王護国寺五重塔	承暦4事始, 応徳3 (1086) 8・18心柱立・棟上, 同年 10・20供養	東宝記, 東寺塔 供養記
法勝寺九重塔	永保元 (1081) 8・25壇築始, 同年9・27居礎, 同年10 ・27心柱立, 同3・10・1供養	水左記, 帥記, 扶桑略記
高野山大塔	嘉保2 (1095) 4・10廂始, 同年6・7手斧始, 同3・ 7・27壇築始, 同年8・21石居, 永長2 (1097) 8・21 棟上, 康和元 (1099) 11・1葺始, 同2・7・7絵, 同年 完成, 同5・11・25供養	高野興廃記
祇園感神院多宝塔	永長元・10・17事始 (築壇・木作始), 承德2 (1098) 10 ・20供養	中右記
尊勝寺兩塔 (五重 塔)	康和3 (1101) 3・28金物を諸国に宛課す, 同年10・13 心柱立, 同4・7・21供養	殿曆, 尊勝寺供 養記
石清水八幡宮大塔 (多宝塔)	天永元 (1110) 8・8木作始, 同年10・5築壇, 同年10 ・29居礎・心柱立, 同2・8・29棟上, 同3・2・17供養	石清水文書
春日社西塔 (五重 塔)	天永3・8・7事始 (木作始・壇築始・礎居始), 永久 元 (1113) 7・10心柱立, 同2・3・4心柱中柱続立, 同年7・29心末柱続立, 同4・3・6供養	殿曆, 中右記
法界寺塔	永久2・7・5木作始, 同年10・23居礎, 同年11・27心 柱立, 保安元 (1120) 8・22供養	中右記
南法華寺三重塔	永久3・1・26始, 同年3・3心柱立, 大治2 (1127) 4・23供養	南法華寺古老伝
法成寺兩塔 (五重 塔)	永久5・1・20事始, 元永元 (1118) 10・2心柱立・上 棟, 同2・8・16心柱続立, 長承元 (1132) 2・28供養	殿曆, 中右記
白河泉殿三重塔	保安元・7・5壇築始, 同3・10・19供養	中右記, 百鍊抄
白河塔	大治2 (1125) 10・27心柱立	中右記目録
賀茂下社塔	保安元・1・8木造始, 同年7・5壇築始, 同年8・3 心柱立, 大治3・7・20供養	中右記, 同目録
熊野本宮三重塔	保安元・7・5壇築始, 大治元・11・23供養	中右記

白河泉殿三重塔	大治4・8・3木造始, 同5・2・29棟上, 同年6・24供養	中右記, 百鍊抄
法金剛院三重塔	長承3 (1134) 8・13心柱立, 保延2 (1136) 10・15供養	長秋記, 中右記
興福寺三重塔	保延4・7・18壇築始, 同年10・27棟上, 康治2 (1143) 12・20供養	興福寺別当次第, 本朝世紀
高野山大塔	久安5 (1149) 7・9事始, 仁平元 (1151) 3・19棟上	高野春秋
法成寺西塔	久寿2 (1155) 4・15供養	
	仁平2・6・27木作始, 同3・10・18棟上	兵範記, 本朝世紀
白河福勝院三重塔	仁平3・6・13木作始, 同年6・15居礎, 同年7・16心柱立, 同4・10・21供養	兵範記
蓮華王院五重塔	承安4 (1174) 7・18心柱立・上棟, 治承元 (1177) 12・17供養	百鍊抄
最勝光院塔	治承2・12・2心柱立	百鍊抄
筑紫安楽寺多宝塔	寿永2 (1182) 8・29上棟	安楽寺草創日記
東大寺東塔	元久元 (1204) 4・5事始, 承元2 (1208) 8・21柱立, 同3・6・10二重柱立, 貞応2 (1223) 2・17覆鉢上, 同年3・13九輪上終	百鍊抄, 東大寺略縁起抜書, 無名字書
法勝寺九重塔	承元2・10・14事始, 同4・7・16心柱立・棟上, 建暦元 (1211) 3・20六重柱立, 建保元 (1213) 4・26供養	百鍊抄, 明月記
春日社西塔	寛元4 (1246) 4・25心柱立	葉黄記
教王護国寺五重塔	弘安2 (1279) 8・20事始, 同4・8・10心柱立, 同8・12・17造畢	東宝記

したことになる。総高さ三二〇尺に及ぶ七重の大塔であるから、それ位の工期は当然であろう。

教王護国寺五重塔 承暦四年(一〇八〇)に事始があり、六年後の応徳三年(一〇八六)八月十八日心柱立・棟上が行われ、同年十月廿日に供養されたという(『東宝記』)。事始から心柱立までの期間が長いのもかく、心柱を立ててから二カ月後に落慶供養というのは、工期的にはとても無理である。また、ここで初めて「棟上」がでてくるが、この塔は心柱が心礎立てであるから、心柱立と同時に棟上というのも理解できない。

法勝寺九重塔 永保元年(一〇八一)八月廿五日壇築始、九月廿七日に居礎、十月廿七日に心柱立が行われ(『水左記』)、落慶供養は二年後の同三年十月一日であった(『扶桑略記』)。その後傾いたため修理され、承徳二年(一〇九八)十月廿三日に供養されている(『中右記』ほか)。

この塔は承元二年(一一〇八)五月十五日焼失し、同年十月十四日事始、一年九カ月後の同四年七月十六日に心柱を立てて棟を上げ、建暦元年(一一二一)三月廿日六重目の柱を立て(『百鍊抄』)、事始から四年六カ月後の建保元年(一一二二)四月廿六日に供養された(『明月記』)。再建塔は創建塔の約二倍の工期を要したことになる。

**高野山大塔** 創建塔が正暦五年（九九四）六月に焼失したあと、約百年経った嘉保二年（一〇九五）四月十日に杣始があり、同年六月七日手斧始、翌三年七月廿七日壇築始、八月廿一日石居が行われた。杣始から二年四カ月経った永長二年（一〇九七）八月廿一日に棟上があり、心柱が引立てられた。さらに二年三カ月後の康和元年（一〇九九）十一月一日檜皮葺始、翌二年七月七日から三十日間で内陣の彩画を終え、同年竣工している。落慶供養が行われたのは三年後の康和五年十一月廿五日であった（『高野興廢記』ほか<sup>②</sup>）。

この塔は久安五年（一一四九）五月十二日に焼失し、同年七月九日再建の事始があり、一年八カ月後の仁平元年（一一五一）三月十九日棟上、さらに四年一カ月後の久寿二年（一一五五）四月十五日供養された（『高野春秋』ほか）。前回と同じく心柱立ではなく棟上と記録され、工期も似たようなものである。

**祇園感神院多宝塔** 永長元年（一〇九六）十月十七日に事始（築壇并木作始）があり、丁度二年後の承徳二年十月廿日に供養された（『中右記』）。

**石清水八幡宮多宝塔** 石清水八幡宮には宝塔院と二基の多宝塔が建てられたが、多宝塔のうち大塔は天永元年（一一一〇）八月八日木作始、十月五日築壇、同月廿九日居礎及び心柱立、十カ月後の天永二年八月廿九日に棟上が行われた。木作始から一年六カ月後の同

三年二月十七日には供養が行われている（『石清水文書』）。居礎と心柱立が同時に行われたことからすれば、心柱は心礎立てということになるが、多宝塔としてはこの点が問題である。

**春日社西塔** 春日社には二基の五重塔が建てられたが、撰政藤原忠実祈願の西塔は天永三年八月七日に事始（木作始・壇築始・礎居始）が行われた。十一カ月後の永久元年（一一一三）七月十日心柱立のあと、翌二年三月四日心中柱統立、七月廿九日心末柱統立が行われており、心柱が三本継であったことが分かる。居礎から最初の心柱を立てるまで十一カ月を要しているため、心柱は心礎上ではなく初重天井上に立てられたかとも思われるが、居礎は木作始と同時に行われていることから判断すると、おそらく儀式として行ったもので、心柱立のできる状況ではなかったのではなからうか。本尊が四仏であるというから、心柱は心礎立てであったと考える方が順当である。心末柱が立てられた時には四重目まで組立が終っており、さらに二カ月半後の十月十五日には五重の組立が完了した。落慶供養は事始から三年七カ月後である（『殿曆』『中右記』）。

**法界寺塔** 日野法界寺の塔は永久二年（一一一四）七月五日に木作始、十月廿三日居礎、その一カ月後十一月廿七日に心柱を立てている。供養が行われたのは心柱立から五年九カ月後の保安元年（一一二〇）八月廿二日であった（『中右記』）。心柱立が居礎から一カ

月後というのは少し早いようにも思われるが、本尊は釈迦・多宝の二仏であるから、心柱を天井上に立てたとみる方が妥当であろう。

**法成寺東西兩塔** 永久五年正月八日に焼失した東西兩三重塔は、五重塔として計画され直ちに同月廿日事始が行われ(『殿曆』)、一年九カ月後の元永元年(一一一八)十月二日に心柱立・上棟が行われた。その十カ月後、翌二年八月十六日心柱統立があり、さらに十二年六カ月経った長承元年(一一三二)二月廿八日に落慶供養された(『中右記』)。些か期間が長過ぎるが、これは造塔にあたった近江守為隆が工事中に没したからであろう。『知信朝臣記』所収の指図によると、兩塔とも心柱は心礎立てで、西塔に金剛界大日四躰、東塔に胎藏界大日四躰を祀っていた。

**賀茂下社塔** 保安元年一月八日木造始、七月五日に築壇・居礎、その一カ月後八月三日に心柱を立てている(『中右記』)。木造始から八年六カ月後の大治三年(一一二八)七月廿日に供養されたりし(『中右記目録』)。

この塔は約廿年後に焼失したらしく、仁平二年(一一五二)七月九日に再建供養されている。『兵範記』によると、塔は多宝塔で、釈迦・多宝二仏を安置し、天蓋があったというから、心柱は天井上に立っていたことが分かる。

**白河泉殿三重塔** 白河殿には多くの塔が建てられたが、そのうち

の一基、家保が九体阿弥陀堂と一諸に造立した三重塔は、大治四年(一一二九)八月三日木作始、翌五年二月廿九日棟上が行われた(『中右記』)。同年六月廿四日に供養された(『長秋記』『百鍊抄』)とすると、木造始から十一カ月しか経っておらず少々早過ぎるので、この時の供養をこの塔とみるにはやや問題があるろう。

**法金剛院三重塔** 長承三年(一一三四)八月十三日に心柱を立て(『長秋記』)、二年二カ月後の保延二年十月十五日に供養されている(『中右記』)。

**興福寺三重塔** 皇嘉門院御願の三重塔は保延四年(一一三八)七月十八日壇築始、同年十月廿七日棟上(『興福寺別当次第』)、それから五年二カ月後の康治二年(一一四三)十二月廿日供養された(『本朝世紀』)。

**白河福勝院三重塔** 仁平三年(一一五三)六月十三日木作始・築壇、十五日居礎が行われ、一カ月後の七月十六日に心柱が立てられている。七月十六日の記事から、心柱が初重天井上に立てられたことは明らかであり、居礎から心柱立まで一カ月という期間は、前述の法界寺、賀茂下社兩塔と同じである。さらに、一年三カ月後の仁平四年十月廿一日供養が行われており、本尊は釈迦・多宝二仏で、来迎壁があったという(『兵範記』)。

**蓮華王院五重塔** 承安四年(一一七四)七月十八日心柱立并上

棟、三年五カ月後の治承元年（一一七七）十二月十七日に供養されている（『百鍊抄』）。『吉記』承安四年二月八日の記事によると、二月十六日に心柱を立てる予定であったという。

東大寺東塔 治承四年（一一八〇）に兵火で焼失したあと、元久元年（一二〇四）四月五日になって再建の事始（『百鍊抄』）、承元二年（一二〇八）八月廿一日柱立、翌三年六月十日二重目柱立が行われた。その後工事は一時中断されたが、建保四年（一二一六）再開され（『東大寺略縁起拔書』）、貞応二年（一二三三）三月十三日には九輪が上げられている（『無名字書』）。完成したのは安貞元年（一二二七）頃らしい。

### 三 心柱立と棟上

遺構と文献について造塔の工程に関する記録をみると、時代によって内容が少し違っていることが分かる。まず奈良時代以前では、心柱立・舍利安置、露盤上の記録がでてくる。この時代の塔は三重・五重・七重・九重のいわゆる層塔形式で、遺構・遺跡でみるかぎり心柱は掘立てあるいは心礎立てとされている。造塔の目的は仏舎利の奉安にあり、必ず仏舎利が心礎・心柱・相輪のいずれかに奉安された。したがって、仏舎利に直接関連する心柱が最も重視さ

れ、建立に際しては真先に立てられたのである。それは組立て工事の開始を示す段階として工程上も重要であった。一方、露盤（相輪）は屋根が葺き終ってから上げるのであるから、組立て工事がほぼ終わったことを示す段階として重要である。しかも、相輪は仏塔の源流であるインドのストゥーパを形どったものであり、仏塔の象徴ともいえる部分であるから、それを上げる意義は大きい。

平安時代前期についてもほぼ同様であったと考えられる。

平安時代後期になると、工程を示す記録が増え、それだけ儀式ばった行事も多く行われたのであろうが、その中で問題となるのは棟上である。他の建物では軸組の最上部に棟木があり、これを上げるとはほぼ建物の形がでさるので、棟上は工事の前半における重要な区切りとして儀式が行われる。しかし、塔には棟木に相当する材がなく、元来棟上は考えられない。それでは、記録に現われる棟上は何を意味するのであろうか。

最初に棟上がでてくるのは、応徳三年の教王護国寺五重塔であるが、前述のようにこの記録によると工程上無理があることから、やや信憑性に欠けるようにも思われる。信頼のおける記録としては、永長二年の高野山再建大塔が最初であろう。『高野興廢記』等によると礎石を据えた一年後に棟上が行われており、心柱立はみられない。棟上は「此日下柱皆立、心柱引立」とあって、下重の柱を立てた上

に心柱を立てたことが分かる。心柱を受ける梁を棟木にみたてたものであろう。この時の記録には各柱の寸法等も記されており、その長さからみても心柱が下重天井上に立てられたことが分かる<sup>4)</sup>。この塔はいわゆる大塔形式の多宝塔で、大日五仏を本尊とするから、中尊を下重中央に安置するため、心柱が天井上に上げられたと解釈される。

続いて多宝塔についてみると、石清水八幡宮多宝塔で天永二年に棟上が行われている。この塔は、十カ月前に居礎と心柱立が同時に行われており、この記録に誤りがなければ心柱は心礎立てとなるが、そうだとすれば棟上が何を指すのかわからなくなる。本尊は釈迦・多宝二仏であるから心柱があってもその前に二仏を安置すればよいが、現存する遺構でみるかぎり多宝塔で心柱を心礎立てとしたものはない。後世編纂された記録であるから、間違いがないとはいえない。筑紫安楽寺多宝塔では寿永二年（一一八二）に上棟の記録があるが、詳しいことは分からない。

同じ多宝塔でも雲林院多宝塔・賀茂下社塔には棟上の記録が見当たらない。前者は天徳四年（九六〇）に心柱が立てられたが、本尊として大日五仏を安置したことからすれば、心柱は天井上に立てたと考えたい。後者は居礎の一カ月後に心柱立が行われたことから、心柱を天井上に立てたとみてもよいことは前に述べた。

法界寺塔も釈迦・多宝二仏を本尊とするが、多宝塔か三重塔なの

かは不明である。やはり棟上の記録はみられないが、永久二年居礎の一カ月後に心柱立が行われているので、心柱は天井上に立てられたのであろう。

次に、層塔で棟上の記録があるものをみよう。法成寺東西両塔は、前述したように心柱を心礎立てとした五重塔で、元永元年に心柱立・上棟が行われた。『殿暦』によると、「依立塔心柱上棟也、（中略）立柱之後、先東塔付綱、次西塔立了、又著絹屋、次乱声上棟」とあり、心柱立を上棟と同じ意味に扱っている。これは塔本来の心柱立の意義を忘れたものといえよう。

法成寺塔と同様の扱いは蓮華王院五重塔と法勝寺再建九重塔の記録にもみえる。前者は承安四年に心柱を心礎上に立てているが、『百鍊抄』はこれを「立心柱并上棟」と記している。後者は承元四年に心柱立を行ったが、このことを『仁和寺日次記』では「心柱立之并棟上也」と記している。永保元年の創建時には心柱立しかでてこない。創建塔の心柱が礎石立てであったことは、『百鍊抄』保延六年十一月十四日の記事「被直法勝寺九重塔心柱基、土氣二尺許朽損之故也」によって明白であり、再建塔もおそらくこれを踏襲したと思われる。

伊予守家保の造立した白河泉殿三重塔や興福寺三重塔・法成寺西塔にも棟上の記録がみられる。白河泉殿三重塔では木造始から七カ

月後の大治五年に、興福寺三重塔では壇築始の三カ月後の保延四年に、法成寺西塔では木作始から一年四カ月後の仁平三年に、それぞれ棟上が行われている。三塔とも心柱立の記録は見当らず、また心柱が心礎立でであったのか、あるいは天井上に立っていたのかは明らかでない。しかし、法成寺西塔は前身塔と同じく五重塔であろうから、心礎立でと思われる。

一方、法成寺東塔の承保二年、興福寺五重塔の万寿四年、尊勝寺五重塔の康和三年、春日社西塔の永久元年、南法華寺三重塔の永久三年、法金剛院三重塔の保延二年、白河福勝院三重塔の仁平三年、最勝光院塔の治承二年の各記録には心柱立だけで、棟上は見当らない。このうち、法金剛院・白河福勝院両三重塔は心柱が天井上に立てられたが、法成寺塔は薬師寺塔を模したというから心柱は心礎立であろうし、興福寺・春日社の両五重塔も本尊が四仏であるから心礎立であったと考えられる。ほかの塔の心柱の立て方は分からない。

以上のように、残された記録から判断すると、「棟上」は十一世紀末の多宝塔で最初に現われる。平安時代に密教寺院で創建された多宝塔では、仏舎利の奉安は行われず、大日五仏が本尊として安置されたため、心柱に対する考え方の相違や本尊安置の関係から、心柱は天井上に立てられたと考えられる。したがって、下重の柱上に

梁を架けて心柱を立てることになり、この梁を上げることが棟上と称したのではなからうか。多宝塔では従来の層塔ほど心柱が重要な意味をもたなかったため、「心柱立」よりも梁を上げる「棟上」の方が他の仏堂等と同じように重んじられたと思われる。ただし、石清水八幡宮多宝塔のように、十二世紀初には心柱を心礎立とした多宝塔があったのかもしれない。

十二世紀初になると、層塔でも棟上の記録がみられる。はじめ、多宝塔において天井上に梁を架けて心柱を立てることを棟上と称していたものが、次第に層塔にも波及し、心礎立で・天井上の如何にかかわらず、心柱立を他の建物における棟上と同等にみなすようになったのではなからうか。それ以来、多宝塔・層塔とも心柱立と棟上が同じ意味に用いられたようである。

ところが、遺構についてみると、室町時代以降柱立と棟上が明らかに別の工程として記録されている。向上寺三重塔では永享四年立柱後、初重を一カ月半、二重・三重をそれぞれ一カ月で造ったあとに上棟が行われた。工期からみて、立柱は初重の柱立であり、上棟は全体の軸組が組み上がったことを指すと思われる。

八幡神社三重塔では、初重柱か心柱かは明らかでないが、長祿二年に立柱が行われ、八年以上経ってから上棟されている。その間が少し長過ぎるので、工事が中断された時期もあったのだろうか、こ

の上棟もおそらく軸部全体が組み上った段階を指すのであろう。

教王護国寺五重塔には棟上の文字こそないが、「九輪之棟ノ榎ヲ打」という記録があり、これがまさに向上寺・八幡神社両三重塔の上棟に相当するものと考えられる。軸組の組上げが終わり、左義長柱上に相輪の露盤を載せる井桁を組むことを指したものであろう。このあと、新勝寺三重塔・日光五重塔にみられる上棟も同様の工程を示すものと思われる。

このように、室町時代以降の塔では心柱受梁を上げる従来の棟上とは違って、他の建物と同じく軸組が完了した時点での「上棟」が行われたらしい。「立柱」も行われたが、「心柱立」ではなく初重の柱立であるらしく、この点も他の建物と変わらない。いずれにしても、心柱を重視しなくなった結果によるものと考えられる。なお、こうした扱いが南北朝時代あるいは鎌倉時代まで溯るか否かは、いまのところ資料不足で判明しない。

#### 四 心柱の立て方

すでに述べたように、多宝塔においては創建当初からあるいは創建後間もなく、心柱が下重天井上に立てられたと考えられるが、層塔においても平安時代以降心柱を天井上に立てるものが現われる。

それはおそらく多宝塔の影響を受けて、大日如来の五仏あるいは独尊を本尊として祀ったためであろう。遺構についてみると、承安元年（一一七一）建立の一乗寺三重塔・治承二年（一一七八）移築の浄瑠璃寺三重塔をはじめとして、それ以降の三重塔はすべてがそうなっている。五重塔は建保二年（一一二四）の海住山寺五重塔が最初で、それ以降は心礎立てとほぼ半々となる<sup>(5)</sup>。塔の遺構は天曆五年（九五二）完成の醍醐寺五重塔から一乗寺三重塔まで二二〇年の間に一基も存在しないが、丁度その頃は最も造塔の盛んな時代で、新形式の多宝塔が普及し、層塔の心柱の工法にも変化を来した時代ではなかったかと考えられる。

文献に現われる層塔のうち、心柱を天井上に立てた確かな例は、保延二年（一一三六）供養の法金剛院三重塔が最初であり、続いて久寿元年（一一五四）供養の白河福勝院三重塔がある。法金剛院塔は五仏、白河福勝院塔は釈迦・多宝の二仏を本尊としていたから、心柱が初重にない方が本尊を安置し易いと考えられる<sup>(6)</sup>。

同じ層塔でも五重塔は三重塔と違って、心柱を天井上に立てた例は平安時代には見当たらない。長承元年（一一三二）供養の法成寺東西五重塔では、心柱は心礎上に立てられている。『吉記』承安四年二月十七日の記事に「院仰云、蓮華王院御塔御仏被始八体了、而御覽法金剛院御塔之處、中尊一併脇士四体也、頗宜之様御覽之、

#### 四 心柱の立て方

(中略) 予申云、五重塔有心柱被安置八体也、三重塔無心柱、安置五体歟、法金剛院三重御塔歟、此條雖不及異議、不及執奏」とあるように、十二世紀末には五重塔では心礎立、三重塔では天井上といふのが普通で、それは安置仏によるものと考えられていたことが分かる。

ところで、心柱立はどのようにして行われたものであろうか。飛鳥・奈良時代の掘立てについてはもちろん記録がないが、遺跡の発掘調査によってある程度知ることができる。山田寺や川原寺の塔では、まず地面を総掘りして版築で基壇を築いてゆき、ある程度高くなったところで心礎穴を掘る。その穴へ心礎を迂り込ませるために傾斜した溝を掘り、心礎を据えたあとその溝に心柱をねかせ、徐々に立てていったと考えられている<sup>(7)</sup>。もっとも、斜めにねかせた心柱をどのようにして垂直に立てたかは明らかでない。

心礎立ての場合は、永保元年十月廿七日法勝寺九重塔心柱立の様子が『帥記』に、また元永元年十月二日法成寺両塔心柱立の様子が『中右記』に記されている。前者は「御塔壇上結麻柱、工等登上、上卿喚弁通、相尋刻限、午二点者、時助依上気色、多時助打之、冠衣麻柱下工夫揚声、次立柱、東西麻柱上」とあって、基壇上に足代(麻柱)を設け、足代の上と下に工人がいて柱を立てたことが分かる。後者は「行高打鐘、殿下取綱、為隆取綱進、南面東上内府以下随召令曳綱結、則立定心

柱、是從本麻柱中寄立礎傍例也、則立定了、又令取西塔綱給始初、北端、則立定了」とあって、心柱の綱を引き、周りに足代を設けた心礎に立て定めたという。

天井上に立てた例としては、仁平三年七月十六日の白河福勝院三重塔心柱立について『兵範記』は「御塔壇上、兼結麻柱、立四方柱、調一重組物懸垂木等、心柱同仮立中心、未立堅、(中略)次工等登麻柱大工則経、帯束、於前庭行事、末工等立心柱、固沮物退下、次引以工散位兼貞捧五色幣、登麻柱、大工則経同登副心柱立幣、兩人相共退下」と記している。すなわち、基壇上に足代を設け、初重の柱を立てて組物・軒を組み、心柱を一旦仮立てしておいてから、工人が足代に上って立てたというのである。同じ天井立ての法金剛院三重塔については、『長秋記』の長承三年八月十二日の条に「塔經藏皆結麻柱、引度棟木、御塔立心借柱、壇未堅、仍礎只如在也」とあって、経藏の棟木と同時に心柱立を行っているが、塔は基壇がまだ固まらないため仮心柱を立てたといひ、形ばかりの心柱立であったらしい。高野山大塔の承徳元年八月廿一日の心柱立(上棟)についてはすでに述べた。

次に、心柱の統立について述べておこう。塔の心柱は一本で通したのではなく二、三本継とするのが普通である。通し材だとそれだけの長い真直な材を調達するのが大変だし、立てることもむずか

しくなる。五重塔の場合は三本継が多いようで、遺構の例では醍醐寺・明王院・教王護国寺各塔がある。文献をみても、春日社西塔は心柱が三本継で、『殿曆』・『中右記』に最初の心柱立から中・末の心柱続立まで記録されている。法成寺両塔にも心柱続立の記録がみられるが、この場合は第二柱と記しており、何本継であったのかは分からない。

## 五 工事期間

おしまいに、工事期間にも少しふれておこう。記録に現われる心柱立・棟上・供養等は日を選び儀式として行うものであるから、実際の工程とは必ずしも一致しない場合がある。醍醐寺五重塔では朱雀上皇崩御のために落慶供養を一年遅らせているし(『吏部王記』)、高野山大塔では竣工後三年経って供養が行われた。心柱立や棟上の日を予定より少し遅らせた例は多い。また、工事は必ずしも継続して行われるとは限らず中断することもあるため、経過した年月がそのまま工事期間にはならない場合もある。根来寺多宝塔はその極端な例で、文明十二年(一四八〇)の下重組立から天文十六年(一五四七)の雑作まで六十七年もかかっている。東大寺東塔(再建)は承元二年(一一〇八)八月に立柱、翌年六月二重が立柱されながら

一時工事が中断し、建保四年(一一二六)一月になって再開、貞応二年(一一二二)三月九輪を上げ終っているが、このように中断した期間がほぼつかめるのは稀である。

さらに、陰曆では閏月があるため、月数はややこしくなるが、これらのことを含んだ上であえて工期を数えてみると次のようになる

(図一・図二参照)。

事始・木作始・手斧始から竣工・供養まで	
高野山大塔(一次再建)	約五年六カ月
感神院多宝塔	二年
石清水多宝塔	一年六カ月
春日社西塔	三年七カ月
南法華寺三重塔	二年一カ月
法界寺多宝塔	六年一カ月
法成寺両塔(五重塔)	十三年五カ月
賀茂下社塔	八年六カ月
白河泉殿三重塔	十一月
高野山大塔(二次再建)	五年九カ月
白河福勝院三重塔	一年四カ月
東大寺七重塔(再建)	約二十三年
法勝寺九重塔(再建)	四年六カ月

五 工 事 期 間

図 1 遺構の工程

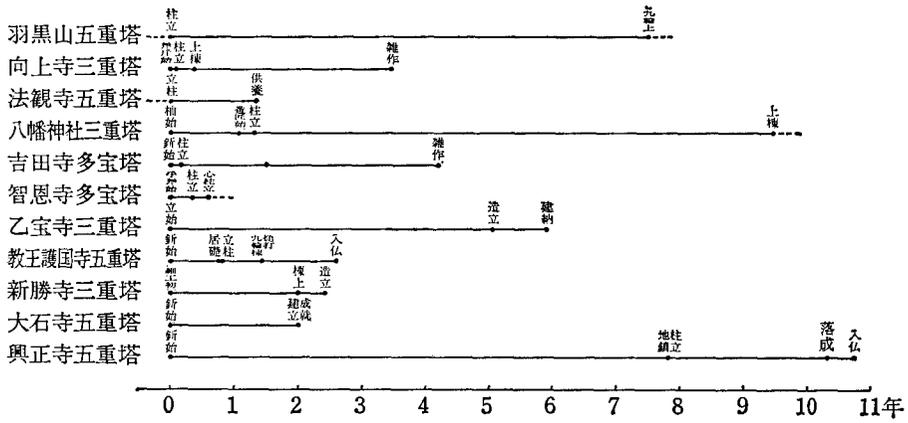
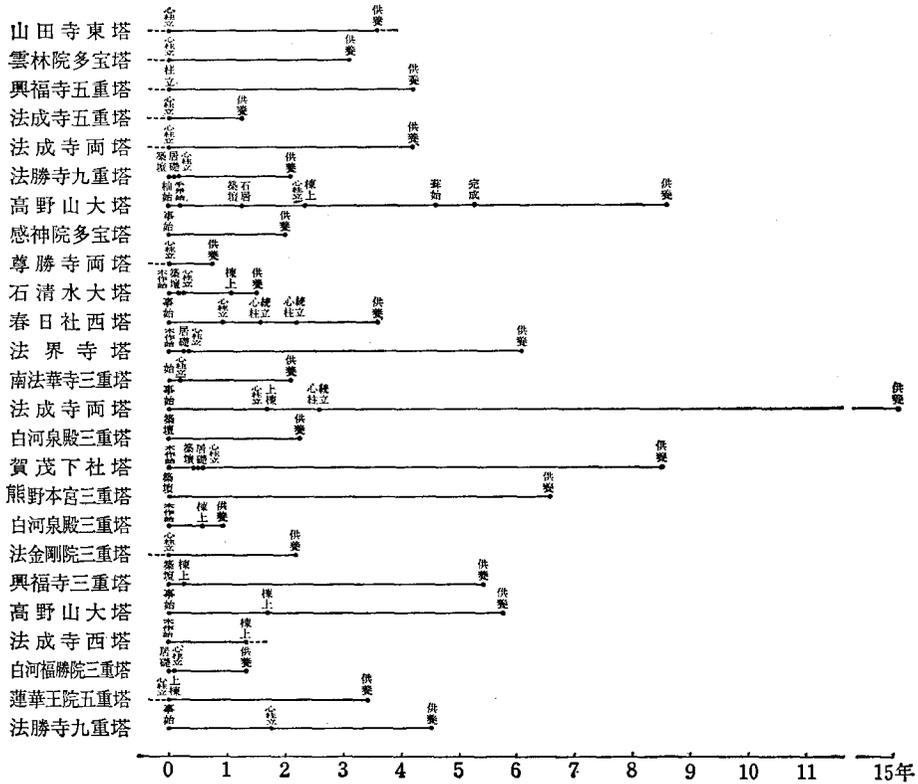


図 2 文献にみる工程



向上寺三重塔	三年六カ月(雑作まで)
吉田寺多宝塔	四年三カ月(雑作まで)
乙宝寺三重塔	五年十一カ月
教王護国寺五重塔(現存)	二年七カ月(入仏まで)
新勝寺三重塔	二年五カ月
大石寺五重塔	二年
興正寺五重塔	十年四カ月
築壇から供養まで	
法勝寺九重塔	二年一カ月
熊野本宮三重塔	六年四カ月
白河泉殿三重塔	二年三カ月
興福寺三重塔	五年五カ月

この場合は木作始から築壇までの工期を加えなければならぬが、それは一カ月から六カ月位であろうか。

心柱立から供養まで

雲林院多宝塔	三年一カ月
興福寺五重塔(前身)	四年二カ月
法成寺五重塔	一年三カ月
法成寺東塔(三重塔)	四年二カ月
尊勝寺両塔	九カ月

法金剛院三重塔	二年二カ月
蓮華王院五重塔	三年五カ月
法観寺五重塔	一年四カ月
西明寺三重塔	三年六カ月(雑作まで)

この場合は木作始から心柱立の工期を加えることになるが、その期間は前記の例でみると相当長短があつて一カ月から一年九カ月、極端な例を除くと三カ月から一年位であろうか。

なお、以上のうちで白川泉殿三重塔と尊勝寺両塔の一年未満というのはいかにも短く、問題がある。

このように、工事期間は各塔によって随分と異なり、標準的な工期はつかみがたい。規模の大小、形式の別をはじめ、建立場所の地理的条件、建立者の経済能力、当時の社会状況等によることはいうまでもなからう。なお、以上の工事期間には材料調達の期間は含まれていないと思われる。

注

(1) 多宝塔については、その名称や初期の形態等に問題があるが、ここでは現在多宝塔と称される下重方形、上重円形の平面をもつ形式の塔を指すこととする。拙稿「宝塔と多宝塔」(『仏教芸術』一五〇号、昭和五十八年九月)参照。

(2) 高野山大塔再建の工程期日については、記録によって多少の違いがある。『高野山文書』では杣始を嘉保二年四月、壇築始を同三年七月廿日、『高野春秋』では壇築始を七月七日、竣工を康和二年十月廿五日として

- いる。
- (3) 『百鍊抄』によると、この時供養されたのは東塔で、別の塔が三年後の天承二年十月十日に供養されている。
- (4) 『高野山旧記』大塔再建時の記録は創建塔の寸法等にもふれており、心柱の長さを嘉保二年の記事では十五丈五尺二寸、康和二年の記事では七丈末一丈三尺としている。したがって、創建大塔の心柱は嘉保二年の記事によれば心礎、康保二年の記事によれば天井上に立つこととなり、矛盾する。両者の記録は柱の本数等も少し違っており、どちらが正しいのか簡単には決められない。
- (5) 拙稿『日本仏塔の形式、構造と比例に関する研究』（私家版、昭和五十八年一月）参照。
- (6) 五仏の場合は中央に中尊を置き、その四方に四仏を配する。二仏の場合は横に並べて安置するので、心柱の前でもよいが、やはり心柱のない方が具合がよい。四仏の場合は心柱の四方に四面を向いて置かれることになる。
- (7) 奈良国立文化財研究所編『川原寺発掘調査報告書』（昭和三十五年三月）及び『飛鳥藤原宮発掘調査概報七』（昭和五十二年五月）参照。

（国立歴史民俗博物館 情報資料研究部）